司馬遼太郎の東アジア観における台湾
—『台湾紀行』を中心に—
How Was Taiwan Perceived in Japan : Shiba Ryotaro's Journey to Taiwan in the 1990s

岸川　あゆみ
KISHIKAWA, Ayumi

摘要

Shiba Ryotaro, who is one of the most renowned historical novelists in Japan, wrote a piece of travel writing in Taiwan "台湾紀行" in the early 1990s. This piece has had a massive influence on how Japanese people grasp the whole picture of Taiwan because the 1990s was a significant period of transition for Japan-Taiwan relationship after World War Ⅱ. Intercommunion between Japan and Taiwan had been interrupted until the 1990s because there was a postwar occupation conducted by the Allied and a break-off of diplomatic relations. However, the Withdrawal of martial law in Taiwan in 1989 boosted international exchanges. Shiba's travel piece in Taiwan in 1993 was one of the books that were written about Taiwanese history and published in the early days of the "new" relationships. Based on those backgrounds of history between Japan and Taiwan, this paper will clarify an image of Taiwan in postwar Japan by analyzing how Shiba described Taiwan in his influential work.

This study especially focuses on the distinguished idea of this travel piece that Shiba considers not only Japan-Taiwan context but also a whole picture of East Asia. Shiba's view of East Asia was formed through his own experiences over a half-century including the period of World War Ⅱ. For instance, He was raised with Koreans in Japan before War and in the University learned Mongolian study which was influenced by the strategic design of Asia during War. After War, he visited South Korea and Chines mainland again and also wrote down travel pieces. This article first explores his process of thought formation about East Asia and places his view of Taiwan in that picture. Moreover, it is also considered the influence which those insights brought on the image of Taiwan in Japan.

キーワード：*日台関係　司馬遼太郎　東アジア　戦後日本*

Keywords: Japan-Taiwan relations　Shiba Ryotaro　East Asia　Postwar Japan

1． はじめに

司馬遼太郎の『台湾紀行』（1993-1994）は、先行研究において、主に日台関係を背景とした司馬の植民地認識に焦点が当てられてきた。例えば、後藤新平ら植民統治に関与した人物を描く点から近代日本国家の形成と台湾の植民統治を結びつけた構図を持つ作品として分析した丸川(2005)や、作中のインフォーマントを ①植民地時代の「台湾人」②植民地時代の「日本人」に分類して分析し、司馬自身がかつて帝国側の人間であったという占領者としての自己認識に欠けている点を指摘した成田(2009:p.326, pp.328-329)の分析がある。他方で、『台湾紀行』の台湾描写に注目してみると、『台湾紀行』の特徴は、むしろ司馬が旧植民地としての台湾という視点や日台関係という文脈だけに捉われていなかった点にある。つまり、司馬が東アジアという構図を以って台湾を観察していたと思われるのである。

本稿では、『台湾紀行』における台湾表象を、司馬の戦前・戦中・「戦後」に跨る東アジア観の形成過程と対照しながら、司馬がどのようにその構図の中に位置付けたかを分析する。また、この分析を通して、司馬のアジア観の一端を明らかにすることで、戦後日本におけるアジア認識の研究に資することを目的とする。

さらに、本作は戦後日本の台湾認識においても、重要な位置にあると言える。戦後の日台関係については、先行研究では台湾の脱植民地化状況に対する関心が強く、丸川による『台湾、ポストコロニアルの身体』(2000)を皮切りに、支配者と被支配者の二項対立による被支配者の受動的イメージを覆す試みの一環として五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における〈日本〉植民地経験の連続・変貌・利用』(2006)や植野弘子・三尾裕子編『台湾における＜植民地＞経験−日本認識の生成・変容・断絶』(2011)、三尾裕子・遠藤央・植野弘子編『帝国日本の記憶/台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』(2016) といった継続的な共同研究による成果が出されてきた。他方で、台湾の脱植民地化状況についての研究蓄積を踏まえた先に日本自身の脱帝国化のプロセスがある。つまり、「台湾社会における日本への眼差し」に焦点が当てられてきたが、さらに「日本社会における台湾への眼差し」に対する検討を加える必要がある。

『台湾紀行』は、戦後の国際情勢から長らく日本と台湾の間の交流が非公式であった期間を経て、台湾で 40 年余りに亘って敷かれた戒厳令が解除され、官民で交流再開が本格化した 1990 年代前半に戦前生まれの作家が著した作品である。したがって、『台湾紀行』における台湾表象の特徴を明らかにすることは、戦後日本の台湾認識という問題設定においても意義を持つものであると言える。

2． 『台湾紀行』をめぐる司馬の思惑−司馬はなぜ台湾へ向かったか−

まず浮かぶのは、司馬がなぜ台湾へ向かい、台湾に何を見ようとしていたのか、という疑問

だ。『台湾紀行』は、週刊朝日の 1993 年 7 月 2 日号から 1994 年 3 月 25 日号に「街道をゆく」シリーズの 40 本目(連載 1041 回～1075 回)として連載された[1]。司馬は 3 回に分けて訪台し、台湾全島の沿岸部を一周したのち、当時の李登輝総統と対談「場所の悲哀」を行なった。当時の台湾は、1987 年に戒厳令が解除されて数年しか経っておらず、また 1988 年の蒋経国の死から李登輝が代理総統に就任し、さらに 1990 年から本省人として初めて第 8 期総統に就いて間もない時期だった。当時、産経新聞の台北支局長であり『台湾紀行』にも同行した吉田信行によれば、台湾は「日本にとって親しみのある地域ではあったけれど、もっとも報道がされていない地域でもあった[2]」という。その背景には政治の緊張状況もあり、「大物とされる政治家であっても台湾に接近すれば中国から排除されるのではないかと恐れて、敬して遠ざける風潮」(吉田 : 1998,p.142)が色濃く残る中で、司馬は当時、日中文化交流協会の代表理事でありながら、台湾へ訪問したことになる。

司馬はなぜ台湾へ向かったのか。司馬の大きな関心事は二つあったと言える。一つは、「街道をゆく」全体のテーゼとしてあった日本の歴史探求の一環としての関心だ。これに対し、『台湾紀行』に関して特に持っていたと思われるのが東アジアの構図への関心だった。さらに、この関心も大別すれば二つに別れる。うち一つは同時代の東アジア情勢であった。作中において、台湾行きの契機は、友人で台湾をルーツに持つ作家・陳舜臣からの提案であったように語られている(『台湾紀行』,p.57)が、実際にはもう少し別の背景があった。他でもない陳自身がのちに以下のように証言している。

> 実は司馬さんが台湾へ行きたいと言っていたのは、それより十数年も前のことだった。(中略)司馬さんは行けるようになれば台湾へ行きたいと言ったのだ。それは戒厳令が解除になればという意味である。(陳 : 2005,p.35)

つまり、司馬の関心の中に台湾が入ってきた一番の要因は、1987 年の戒厳令解除にあった。また、そこには戒厳令解除以降の台湾がどのような政治の進路を歩むか、という司馬の従来の「国民国家」への関心を惹きつける点があったと言える。さらに、司馬はこうした台湾の動向に向けた関心を日本の読者に紹介するだけでなく、「たれよりも、大陸中国のひとたちに読んでもらいたいと思っている。」(『台湾紀行』,p.487)と述べていた。李との対談などは、特にその意向を反映していると言える。このように、司馬が台湾へ向かった理由には、日台間の動向の注視というよりもむしろ、東アジア情勢との対比の中での「戒厳令解除後の台湾の旅立ち」への関心という向きが強かったと言える。実際に、台湾、中国大陸から東南アジアに至るまで、アジア各国で反響を得た[3]。

しかし、司馬の台湾への関心は、台湾の同時代の政治情勢に閉じられたものでもなかった。司馬の東アジアという構図へのもう一つの関心は、「東アジア」の近代像としての可能性を台湾

に見ようとするものだった。この点は、先に挙げた国民国家像への関心とも重なっているが、その由来はより古く、戦前から戦後にかけて司馬が自身の体験に基づいて一貫して持ってきた関心であったと言える。

３． 司馬の東アジア観の形成

３．１．ウラル・アルタイ語族という構図

では、そうした司馬にとっての東アジアという構図はどのようなものであったのか。その起点を成したのが、「ウラル・アルタイ語族」世界の構想だったと言える。司馬遼太郎は、1923 年に生まれ、戦前の学生時代には当時の大阪外語学校に所属し、モンゴル語を専攻していた。戦前から戦中にかけてのモンゴル語履修者に支配的だった世界認識のなかには、「モンゴル、満州、朝鮮、日本の属するウラル・アルタイ語族世界が中央アジア、南アジアを通って中国とは別の文明を扱った国々につながる、という戦前のモチーフ[(4)]」(松本・関川・片山：2013, p.300)があり、さらにその構造が漢民族との類縁性を断ち切ることで、満州国やモンゴルを中国から切り離し日本に取り込む当時の政治意図を後押しするものでもあったという（松本・関川・片山：2013, pp.321-322）。つまり、ウラル・アルタイ語族構想自体が多分に大日本帝国の論理と結びついていた、ということになる。従って、戦後においては、この学説は証明されず下火になっていった（片山：2013, p.321）。しかし、司馬の中では戦後もその世界観が貫かれて、司馬史観につながっているという (松本・関川・片山：2013, p.301)。

この指摘は、後の司馬の世界認識に関する語りにも確かに表れている。つまり、中国大陸を起点とした中華世界が中心にあり、ウラル・アルタイ語族世界がそれに対して周縁として認識される傾向が司馬の意識の中にあったと言える。司馬はこれを「辺疆」と称したが、では司馬の「辺疆」という構図の中で台湾はどこに位置付けられたのか。この点を司馬は以下のように語っている[(5)]。

> 小生は子供のころから、辺疆がすきでした。モンゴル、ベトナム、福建省(福建省が辺疆とは異論のあるところでしょう)、韓国、済州島、アイルランド、オランダ(オランダも、福建省同様、辺疆であるというのには、説明が要ります)などを歩き、念頭に台湾はありませんでした。あたまのどこかで、台湾は日本圏だと思っていたふしがあります。陳舜臣さんのささやかな慫慂によって台湾にめざめたのは、小生一代の事件でありました。

司馬が例示した土地は、それ以前の『街道をゆく』で訪ねてきた場所だ。『街道をゆく』は冒頭で触れたように、日本の文化起源探訪及びそこにあるはずの理想を模索する側面を持っていた。上記の発言からは、中華世界に対して「辺疆」にそれを求めて訪ね歩くという戦前・戦中の影

響を受けたウラル・アルタイ語族構図も背景に見えてくる。さらに、この発言からは、『台湾紀行』を契機に、台湾を「辺疆」の一部として思い至るまで、司馬の中で台湾は長らく戦前の大日本帝国の版図そのままに「日本圏」の内側にイメージされてきたということもわかる。

以上の点から、司馬の認識の中では、戦前・戦中に主に議論されたウラル・アルタイ語圏の構想から発した「中華の周縁」と、やはり同じく戦前・戦中に由来を持つ構図としての「日本圏」の構想が重なったところに台湾が置かれていたと言える。そして、こうした台湾の位置付けは、『台湾紀行』を通しても貫かれている[(6)]。

３．２．東アジアの近代についての見通し

３．２．１．司馬の東アジア近代観の基礎

前節のウラル・アルタイ語圏構想を基盤とした発想に対して、肝心の近代以降の東アジアという構図――つまり、アジア認識と台湾観については、司馬の中で具体的にどのように見通されていたのか。この点には、司馬自身の東アジア「原体験」が、より意味を持ってくる。戦前・戦中の司馬の東アジアの原体験に大学時代の語学があったことは先に述べたが、実際にはその縁はさらに以前からあり、大阪・難波に生まれ育つ中で朝鮮半島や中国、台湾を故郷にもつ人々がごく身近にいたことも大きかったようだ[(7)]。また、司馬には学徒出陣に伴う従軍経験がある。満州の四平陸軍戦車学校に 2 年間在籍したのち、本土決戦に備え、朝鮮半島経由で日本に帰るという経験をしており、これがのちの中国・朝鮮への見方に影響したという点が指摘されている(松本・関川・片山:2013, p.300)。この点は裏を返せば、戦中に中国大陸や朝鮮半島の地を踏んだことがあった一方で、戦前・戦中の台湾には訪れた経験がなかった、という相違を示している。

前節で司馬が台湾に対して、「日本圏」の構図を戦後も長らく保ってきたことに言及したが、その由縁も戦前・戦中に訪台しなかったことから来ていると考えられる。この点について、司馬が具体的に言及した箇所を辿ると、以下のように語られている。

> 「中国のずいぶん遠い遠い所まで行っているのに、なぜ台湾が遅れたかといえば、珍しくなかったんです。日本と似たようなものだろうと思った。むろん、来てみれば珍しいです。すべて違う。」
> 「ところが年を取ってくると、親類のうちに行きたくなるんです。ですから今の気持ちは、親類のうちに来たら心が落ち着いたという感じですね。」
> (司馬：1999 ,p.127)

戦中派の司馬にとって、戦前の中国、朝鮮半島を訪れた際から、次にその地を踏むまでは実に 20～30 年の時間の流れを体感していたが、台湾に関しては戦前に訪れたことはなく、また戦後

もそのまま地続きのように意識されていたことがうかがえる。この点は、その後の世代が抱いてきたアジアとの距離感とはかなり異なる[(8)]点だと言える。

この点から、後年の司馬にとっての台湾への視点は、先に持たれていた中国認識やアジア認識との対比の上で形成されたものであると言える。戦後において、司馬は『街道をゆく』の中で、70 年代に 71 年の国交回復後すぐの韓国行きを皮切りに、73 年にはベトナム戦争中のベトナム、モンゴル、そして返還直後の沖縄に訪れている。これらの国への訪問にも、ベトナム戦争やアジアの国家建設といった当時の情勢への関心と、「中国文明の周辺の国々」への関心として、朝鮮・日本・ベトナムへ訪れたいという二つの動機があった(成田：2009, p.217)。しかし、この時期の司馬は『台湾紀行』の時と異なり、後者により比重を置いたため、各国の現状への言及はほとんどなく、古代世界の文明に一貫して記述が割かれている。

こうした韓国、中国大陸等での体験を経て紡がれた、戦後における司馬の東アジアの近代観の基礎は「私」と「公」という概念から成る。これらの概念は以前から継続的に司馬が言及してきたものだが、『台湾紀行』の中で言及されるそれも、その傾向を受け継いでいる。この「公」「私」の概念の発想は、司馬自身の、アジアの「国家」形成における役割への関心から生まれたものだった。そのために、まず先述のように司馬は世界観の中心に中華世界を基本モデルとして想定した。司馬の前提では、中華世界は、家族主義と宗族主義という血族集団をともにする「「私」の同心円」の中にあり、そこには孫文の求めた「天下為公」「国族主義」といった、「血族という私的次元を超えた立場で、公ともいえる」(『台湾紀行』, p.51)概念はないという。つまり、こうした「私」から脱却するためには「公」の観点から国民国家を形成することが必要であるという見解になっている。

３．２．２．司馬の日本、中国大陸、韓国に対する見解

こうした司馬の基準をもとに各国への評価を見ると以下のようにまとめられる。まず、日本について、司馬は 1970 年代頃の発言において、日本は古くは大化の改新の頃から、政治態度・生活秩序の面で「ふしぎに東アジア的な、儒教的中国体制からまぬがれている」(司馬：1998, p.25)と述べ、日本をアジア的行動原則から除外していた。その視点は、「近代的資本主義」に関しても一貫して適用されており、司馬は日本の「インダストリィ」そして「帝国主義」に至るまで、アジア的原則とも欧米の原則とも差別化し、独自の素地の上に成ったものであるとしていた(司馬：1998, pp.22-29)。ここからは、司馬が日本をアジアの中の例外として扱おうとしたことが見えてくる。上記でも述べてきたように、その基準には、中華世界という「中央」の存在があった。

その「中央」に分類される中国大陸に、司馬が戦後に直に触れる経験を得たのは、共産党の招待旅行のかたちによってだった。しかし、それは文化大革命が終りかけのころであり、未来の中国、中国の少数民族問題に強く関心を持っていた司馬だったが、司馬らを迎えた中国側の

唐家旋はのちの外交部長で、公式の歴史観以外の話を聞くことが出来なかったという(村井・山形・山崎・藤谷・浅井:2020, p.134)。その後は、前述の通り、70 年代～80 年代に幾度か中国大陸に通ったが、『街道をゆく』の最終盤に予定されていた旧満州訪問(福田:2013,p.273)を含め、結局 80 年代より後には訪れることはなかった。その結果、実際に足を運んでいたにもかかわらず、直接目にした同時代中国、もしくは近現代中国に対して司馬が著した見解は、古代中国に関する評論に比べ、相対的に少なかった。その中でも司馬の同時代の中国大陸に対する眼差しを捉えるとすれば、例えば、以下のような貝塚茂樹との対談がある。司馬は貝塚に、同時代の文化大革命を背景に、毛沢東による新中国形成には儒教的な「中国の政治文明を否定する」(司馬、貝塚：1971, p.96)ことが必要かを一大関心事として尋ねた。それに対して貝塚は、否定の過程を経ざるをえないという見解を示していた (司馬、貝塚：1971, pp.96-97)。日本の例の中にも出てきたが、こうした儒教体制についての言及は、司馬の中で、先に挙げた中華世界の性質としての「私」と繋がりの深いものだった。つまり、司馬が「私」の要因として指摘したものの一つが、前漢の武帝以来の儒教的政治体制 (9) だった。その中では、最高の資質を仁、そしてそれが人格としてにじみ出るものを徳として、私人である為政者が権力を私物として扱ってきたのであり、民衆の側もまた「私」として自衛せざるをえなかったため、中華伝統の中では「公」の観点が形成されなかった、と司馬は述べる(『台湾紀行』, pp.52-53)。

司馬にとって、先に挙げたような中華文明脱却の先に新たな近代像を見ようとする構造は、このように中国大陸の同時代を眺める過程からも補強されていったと考えられる。この後、司馬は天安門事件という一つの時代のメルクマールを経てすら、文化大革命について改めて評価を定めたとは言えない。しかし、『台湾紀行』では国民党について、蒋経国が自身の後継に一族を指名しなかったことで、伝統的政治から脱却に向かっていると述べ(p.56)、また後に五・四運動精神の名残を台湾の若者に見出しており (10)、暗黙の対比として中国大陸の同時代の政治状況が含まれていたことが推察できる。

さらに中華世界の影響を受けた韓国については、司馬が戦後に初めて訪れたアジアだったことからも分かるように、司馬にとって韓国はかなり早い段階から関心を寄せた存在 (11) だったと言える。しかし、その関心とは、のちの司馬の韓国への紀行からすると、当時の日韓同祖論の影響を受けて日本の源流としての古代「朝鮮」を見直すことにあった。つまり台湾の場合と異なり、結局のところ、司馬には近代以降の朝鮮／韓国を理解しようという意識は薄かったと言える。むしろ、韓国、そして後年の台湾への紀行を通して、司馬の韓国への近代観はよりマイナスの印象へ傾いて行った向きがある。1970 年代の『韓のくに紀行』などでも、近代以降の「植民地」に関する言及などは所々に垣間見られた。しかし、その中での司馬の言及は、基本的に植民地支配の暴虐さは認めつつも、他方で植民地責任を自らが問われることを回避するという姿勢であり、また総じて朝鮮の近・現代を「遅れたもの」とみなす態度であった(成田：2009,pp.206-208)。つまり、司馬にとって近代以降については、古代への関心という本編の「副

産物」としての性質が強かったと言える。

しかし、この際に抱かれた韓国の近代観は20年ほどのちの『台湾紀行』を経ても、基本的には変わらなかったことが見て取れる。前述のように、司馬は蒋経国から李登輝への流れの中で台湾が中華文明的な儒教体制の政治から脱却しているという評価を下したが、これは中国大陸との対比だけでなく、韓国との対比としても働いていた。司馬は、以下のように言及している。

> 一方、韓国は、自分たちのアイデンティティを儒教にもとめようとする傾向がつよく、民族として古思想とのたたかいを(儒教についての是非はともかく)経験しなかったことに、ノンシャランを感じます[12]。

この言葉は、台湾へ足を運んだあとの所感として紡がれたものだ。「古思想」と称した中華世界の影響からの脱却という観点から、台湾をその「成功例」として強調するための対比に韓国が選ばれていたことが見て取れる。むしろ、台湾経験を介して、韓国に対する従来の認識が強化されたとも言える。

では、台湾について、司馬はどのように自身の東アジア観の地図に位置付けたのか。次の節では、本編の記述から見てゆく。

４．『台湾紀行』に描きこまれた台湾

４．１．通史として描かれた台湾史

司馬が、長年にわたって形成してきた東アジアという構図を以って台湾を見たからこそ描き得た台湾表象の特徴がいくつか見られる。

まず一点目に、台湾史が通史の形で描かれたことが挙げられる。つまり、その前から台湾島にいた原住民への言及を含め、ポルトガルの台湾「発見」から順を追って、台湾島という舞台を軸に歴史を書き連ねる形であった。司馬のこうした叙述のあり方は、まず台湾側にとっても大きな意味を持っていた。なぜなら、台湾では長らく国民党政権が主導する形で、実際にはその地を踏んだことのない中国大陸の歴史を学校で教えており、台湾島の規模での歴史を再編する「台湾史」は民主化過程の産物だったからだ。しかも、「台湾史」を描いた学校使用教科書として導入された『認識台湾』も1997年のものであり、むしろ司馬が『台湾紀行』で描き出した「台湾史」は先んずるものであった。実際に当時の台湾における日本語世代の証言の中では、『台湾紀行』を「台湾史」の教科書の先駆けとして評価していた様子も見受けられる(蔡:1998,p.84)。このように、台湾史を再認識することのできる書としての評価は、2021年に復刻された台湾版『台湾紀行』の推薦序においても見ることができる[13]。

また、こうした台湾通史の記述は、日本においてはどのような意味を持っていたのか。まず、

日本における従来の台湾への注目では、中国大陸との関係への注目から日本敗戦以降の時代の「外省人」と「本省人」の関係、もしくは日本統治期への関心などが先行したように思われ、このような台湾島自体の歴史への視野は比較的新しかったと考えられる[(14)]。さらに、そうした本省人の主体性に着目しようとする姿勢は、民主化過程にある台湾の本省人にとってだけでなく、在日台湾人にとってもまた異なる意味があった。実際に、『台湾紀行』への感慨として寄せられた、在日台湾人の言葉には次のようなものがあった。

「在日三十余年、私はこれほど心を打たれる言葉が日本人の口から発せられるのを聞いたことがない。」
「日本人の台湾認識のレベルが窺われる。［日本人は］この島の真の主である台湾人の意志など眼中になかったのである。悲しいことである。その意味では本書は真に啓蒙的な著作である。何よりもこの本には台湾人が描かれている。」
(周：1998,　p.132)

つまり、司馬が台湾島の視点に立ってその通史を描くことで、日本の読者にとって特に盲点となりやすかった、台湾に住む人々の「戦後」を提起したと言える。また、司馬による台湾島の視点に立った歴史記述は、在日台湾人に限らず日本の国際情勢把握においても意味があったと考えられる。周（1998）は、上記の日本人の台湾認識の背景について、日本が長らく北京情勢をより重視することで、台湾については植民統治に関する反省を行うどころか、むしろ祖国の分断・統一問題という冷戦問題の一部としてしか議論されずにきた (pp.131-133)と述べ、戦後とりわけ日中国交正常化以降の国際情勢における日本の態度を指摘している。つまり、台湾の視点に言及する姿勢が、冷戦期においてなされてきた日本の国際情勢把握の構図に一石投じる意味も持っていたことが見えてくる。

４．２．漢民族世界の広がりの中に位置付けられた台湾像

さらに 2 つ目の特徴として、台湾を漢民族世界の広がりの一部として扱う視野が中心的に展開されている点がある。当時の台湾では、本省人の中のアイデンティティの多様化にも焦点が当てられ始めており、外省人も含めて「四大族群」として、「外省人/原住民/客家/閩南」という分類法が整理され始めていた(王:2007, pp.176-178)。漢民族という観点に注目すると、原住民を除いた残りの 3 グループが該当することになる。

従来、台湾を目指す日本人の関心は、植民地期においてもむしろ原住民の存在に向けられていることも多かった。この現象について、丸川（2005）は、1930 年に起きた植民統治に対する原住民の蜂起である「霧社事件」に対して当時の日本人が高い関心を寄せており、中には「武士道」に擬える向きがあったことに触れ、その背景に日本人の漢民族に対する中華文明コンプ

レックスが作用している可能性を提起した（pp.12-13）。これに照らし合わせてみると、まず、司馬の記述においても原住民への関心は見られる。司馬はここで、原住民の首狩りの風習を挙げて、「武士道が、命のやりとりを中心にして、日常の自尊心を磨いてゆくものとすれば山地人の過去の文化もきわめてそれに近かった」(『台湾紀行』,p.416)と述べ、やはり原住民の文化と日本の文化に類似を見出していた。さらに、こうした類似性を強調するとき、念頭にあった対抗軸も明確に示されている。文中では、原住民の風習を規制した二つの「文明」として示唆されるが、一つは日本統治が持ち込んだ「西洋近代」の制度だった。そして、もう一つの「文明」として挙げられたのが、清朝という中華文明による漢化である。ここまでの論調を見ると、司馬も先の丸川が指摘した構造の中に収まっているように見える。しかし、『台湾紀行』において、司馬が焦点を当てたのは原住民だけではなかった。むしろ、台湾における漢民族文化にも同様に関心を持って頁を割いているのである。前節までで検討してきたように、司馬は台湾に対して中華文明の周縁としての期待を抱いていたと言えるが、では何故、ここにきて台湾の漢民族を注視しえたのか。

司馬が『台湾紀行』の中で取り上げた漢民族にはある特徴があった。司馬の出会った人々の構成にも、同様の特徴が見られる。司馬には、日本側のメディア関係者をはじめとして、常時複数人が同行しており(陳:2005, p.35)、現地のメンバーの中には客家の人物が多く含まれていた。具体的には、司馬の希望から紀行の一部に同行した輔仁大学の五人の院生[15]は福建系が 2 人、客家系が 3 人という構成であり、他にも行政院の新聞局員・麦健興もまた客家であった。これに加え、戴國煇や李登輝といった登場人物も客家であり、「客家の人たち」(『台湾紀行』,pp.187-196)では丸々1 章を割いて、彼らに客家というグループとしての視線を投げかけている。例えば、以下のような記述がある。

> 「客家は現実を客観視する、と言われている。同時に気性はげしく、漢民族的現実主義から離れ、宙空にある自分の視点を頑固にまもるともいわれている。」(『台湾紀行』,p.190)
> 「漢民族における郷党意識という地面から、すこし離れている。だから中国全体を見まわすことができ、ときに中国文明を代表することができる。」(『台湾紀行』,p.191)

こうした言い回しから見えてくるのは、司馬が客家を漢民族でありながら例外的な存在として強調し、また評価しようとしていたことだ。つまり、司馬は当時、台湾で重要な位置を占めていた李登輝に代表される客家を媒介することによって、むしろ台湾では漢民族世界の中に「辺疆」の可能性を見いだそうとしたと考えられる。

この点が明確に表されているのが、やはり李登輝への評価のあり方だ。司馬は李について、上記の特徴に加え、漢民族世界の通俗である人治主義を採らない点を同時に見出し、その両者の特徴を併せ持っていることで漢民族社会の新たな形を築く期待を寄せている。この李への評

価の視点はまた、日本の台湾認識自体に意味するところも大きいと考えられる。なぜなら、李登輝による植民地期の教育を評価する発言が多く日本に紹介されているため、日本での李登輝の人物評では、彼が日本語世代である点に関心が集まりやすい傾向が今日に至るまであるからだ。司馬による、漢民族世界の傑物としての李登輝像は、ともすると植民地支配への免罪の文脈にも繋がりかねない、植民地期そして日台間という範疇に閉じられた李登輝のイメージに新風を吹き込むものであると言える。

また、司馬は台湾に根付いた漢民族文化に言及してもいる。司馬は台湾の土俗信仰として聊斎志異などにも見られる鬼信仰にも関心を寄せており、敵味方なく行倒れの人の骨を集めて供養する万善堂を見て、「万善堂とは、台湾の心そのもののようにも思えてくる」という感慨を抱いている。そして、その「台湾の心」のルーツについて、次のように述懐している。

> いまは大陸で滅びつつあるといわれる漢民族特有の倫理感情が、台湾では豊富に残っている。恩を知るというのは、この民族がなによりも大切にしている倫理だが、『聊斎志異』は、そういう倫理感情に適っているのかと思える。 (『台湾紀行』,p.316)

ここでも、やはり台湾における漢民族文化の連なりを示しているが、そこには司馬の感じているその連なりへの好ましさが描かれている。司馬は、ここではなぜ好ましさを示しえたのか。それは、批判の対象としてきた儒教体制の政治構造としての中華に対して、文化圏としての漢民族世界を描き分けられたからだと言える。つまり、この描き分けによって、司馬は自身の記述の中で、「超克」すべき中華と、継承すべき中華を分割して示すことを可能にした。

そして、この点についても、先の例と同様、日本の台湾認識の観点から評価できる点がある。一つ目は、こうした司馬の漢民族文化への関心が、先述の戴國煇ら、文化的「中華」と政治的「中華」への距離感の狭間で悩んだ人々が当時持っていた、いわゆる「中国人アイデンティティ」(羽根:2001,p.154)にも寄り添う形であったことだ。

二つ目は、一点目とも共通する点だが、台湾において清朝時代から日本統治下、またそれ以降にも流れてきた「漢民族文化」の連なり、という「死角」をつく意義を持っていたことが挙げられる。「漢民族文化」や「中華」をめぐっては、政治の方針と結びつきが強く、その価値観の変化に左右されてきた側面が指摘されてきた(菅野:2011, pp.24-28, pp.35-36, pp.46-47)。しかし、司馬は蔡らのように日本統治下、またその後の台湾社会での経験を通しても、ごく自然に生活の中で漢民族伝統を自身の中に持ち続けている人々や生活風土を描き出すことで、政権の意向とはまた別に、人や風土の中に内在し続けてきた姿を提示したと言える。羽根(2001)は、小林よしのり『新ゴーマニズム宣言スペシャル・台湾論』(2000)等の日本側の言説が、「戦後」の台湾について、日本統治と国民党という外来の影響を起点に台湾を描くことで「台湾」と「中国」を安易に切断し、台湾に生きる人々の中にある文化的な「中華」の存在を見過ごしてきた、

という問題点を指摘した(p.157)が、まさに司馬はその看過されてきた、台湾の文化的な「中華」に分け入っていったと言える。つまり、そこには被支配者としての台湾像ではなく、台湾島を主体とした時間の流れを見ることができる。

こうした観点は、中華世界という軸から台湾を眺めた司馬にとって特異なものではなかったと推測されるが、日本の台湾認識にとっては大いに意義のあるものだと考えられる。

４．３.東アジアの近代像としての「青春期」の台湾

では、『台湾紀行』における台湾表象は、3.2.2.で述べた司馬による東アジア認識の中にどのように位置付けられるものなのか、という点を最後に検討する。

今一度整理すれば、司馬の東アジアを巡る命題とは、主に政治構造としての儒教を基盤とした中華文明を「超克」した先に「東アジア」の近代像を見ようとするものであったと言える。『台湾紀行』において、この命題はどのような展開を見せたのか。司馬の目線には、まず日本の同時代の「現状」との対比が意識されていたように思われる。司馬は当時、日本の「現状」への不満を強く抱いていた。

成田(2009)は、司馬が高度経済成長期のサラリーマンに代表される、戦後保守派となった戦中派たちの思想的代表者であったと評価した(p.360)が、まさに司馬の側でも、歴史小説という「大衆小説」を描く中で彼らを読者として想定し、その存在に戦時を反面教師とした、新たな戦後の「国家」像構築の希望を見ていたと思われる。しかし、さらに延吉(2002)は、司馬の 1984 年の講演「訴えるべき相手がないままに」に見られる、司馬自身の晩年の「人間・文明・進歩に対する「叫びたくなる」ほどの不信感・絶望感」を指摘し、同時にこの頃から司馬は語りかけるべき相手を自身や社会が敗戦ですべてをなくした明るさを持っていた「22 歳の自分」に見出すようになっていったと指摘している(pp.42-54)。この絶望感は、一体どのような背景からもたらされたのか。それは、バブル期と崩壊直後の土地投機に見られるような日本の浮き足立った「欲望民主主義」への失望から来る日本の行く末への危惧であったという (松本・関川・片山：2013,p.308)。バブル期の大規模な土地投機とは、すなわち買い叩く側の利益追及を第一とした行為であるため、冒頭の司馬による「私」と「公」の概念に照らし合わせれば、「公」が薄れることを意味していると言える。つまり、司馬の日本社会への絶望とは、戦後に新たに「国家」として再出発してゆく段階と捉えた高度成長期には確立されうると想定していた、東アジアの独自の近代モデルの一つとしての日本像の理想が、虚像として崩れてゆく過程に他ならない。

台湾紀行の初日に、同行した台湾の大学院生は奇しくも、司馬のそうした焦燥を本人に直接投げかけている。

「先生は、ご自分の国の方々だけではなく、全世界の人々に温かい心、気持ちを抱いてい

らっしゃる。しかし、なんとなく焦りを感じていらっしゃるように受け止めております。」
司馬「非常に正確ですな」(司馬:1999,p.139)

司馬は、成長後の戦後日本、日露戦争以降の明治など「青春」以降の時代はいつも捉えかねてきた(松本・関川・片山：2013,p.308)と評されることがあるが、そうした「国家」としての「中年期日本」 (松本・関川・片山：2013,p.308)を尻目に、民主化の過程にあった台湾に「青春期」を見出し得たからこそ、そこに「東アジア」の近代像を見出そうと期待したと推測される。その傾向は、3-2-2 で挙げた中国大陸や韓国の場合と比較してみると、より鮮明である。

中国大陸と韓国の場合には、司馬は当初から同時代のめまぐるしく変化する儒教体制からの「脱却」や、国民国家形成の黎明と見なした時局への関心を持って渡航していながら、残されたのは古代に対する関心の集中だった。司馬がそのように近代以降を切り離して描いたのは、先にも出ていたような、司馬の期待したような「結果」が現状に見られなかったためではないか。例えば、朝鮮に対しては、司馬はウラル・アルタイ語族圏の構想から中華の周縁としての可能性を期待していたと思われるが、中華から飛び出すような儒教体制についての変化を見出せなかったために、古代と近代以降の評価を切り離さざるをえなくなったとも考えられる。

これらに対し、台湾の場合は、司馬にとって日本や中国大陸・韓国などのパターンとも異なる形での「公」の成立への希望を見ることが叶った例といえる。司馬の定義においては、先に述べたように、「公」は血族集団や自己の利益である「私」を超えた国家であり、近代に至るにつれそれが敷衍して「公共」をも意味している。後者の面について、『台湾紀行』では、台北の「でこぼこの歩道」を例に挙げ、歩道は「公共」であるのに、台北では商店ごとの「私」が優っており、自分の店の都合で歩道を盛り上げたりする、と「公」が未だ達成されていない、という評価を下していた。しかし、前者については、具体例として先にも挙げたように、蒋経国が一族の後継を否定したことを「私」の放棄として評価している。つまり、司馬にとって台湾は東アジアの中で、近代「国家」の意味での「公」として成功してゆく可能性を感じさせる例であり、そのような形で中華世界の周縁としての可能性を見つけたと思えたことが、中国大陸や韓国の場合とは逆に司馬が台湾を通史として捉えることを可能にしたとも考えられる。

しかしその反面、司馬の「私」と「公」の観点からの台湾の位置付けには自家撞着的側面も見られる。司馬にとって、台湾や過去の日本など青春期を迎える国家とはつまり、「アジア的な先例」(『台湾紀行』, p.346)を抜け出して政治体制としての「公」を確立することで、大衆についても「公共」が成立してゆくというモデルだった。しかし、このモデルでは肝心の「公共」が成立した社会像とはどのようなものかについては漠然としている。それでも司馬が敢えて「公」という言葉にこだわったのは、先の「辺疆」の構想と併せて考えてみると、司馬の重点が西洋近代とは異なる、アジア独自の近代の可能性を見出す、という過程にあったからだと思われる。しかし、この点についても司馬の指摘は明瞭とは言えない。その表れの一つとして、「公」とい

う言葉の定義の段階で、既にその内容が非常に曖昧になっていることが挙げられる[16]。

さらに指摘するならば、あくまで中国古代思想を基盤として思考されたことが明瞭にされている「公」「私」に対して、「公」が達成された先に置かれた「公共」そして、「近代社会の市民は、自由であるがために個として倫理が確立されていなければならない」(『台湾紀行』, p. 196)と言及した「近代社会の市民」、「個」などの概念自体が、司馬の中でどのような社会像に立脚して提出されたものなのかが判然としない。上記の『台湾紀行』における「でこぼこの道」から司馬の言う「公共」を読み取ろうとすれば、それは、「公衆衛生」などと置き換えても違和感がないものであるために、西洋近代との対比という側面でも、その差異がどこにあるかは見えてこない。その結果として、「アジア的な先例」を放棄した先に西洋近代にたどり着くという構図に近づく可能性すらある。

このような点からすると、司馬が『台湾紀行』において、台湾に見た「儒教体制の超克」とも称すべき特徴が、果たして司馬自身が長年の東アジア考の中で描いてきた「中華の周縁」の結実と言えるものであったかは、疑問が残されている。

５． 結びに

本稿では、日台間の戦後の出会い直しの過程での重要性を持つ『台湾紀行』において、司馬自身の命題としての、東アジアの近代像を模索する視点の中に台湾が置かれることで、日台間のみの視野では見え難かった台湾像が描き出されたことが見えてきた。こうした台湾の位置付けは、戦前・戦中の「ウラル・アルタイ語圏」や「日本圏」といった構想が、司馬の中で戦後に持ち越された中で形成されたものでもあるため、中国大陸や韓国での紀行では、近代認識の欠如などに繋がる側面があった。他方で、『台湾紀行』においては「中華文明」を軸とした、東アジア一帯への見通しの広がりは、現地の同時代の潮流とも寄り添う形で、台湾島を主体とした時間の流れを把握することを可能にしたと言える。先行研究において、司馬は『台湾紀行』を含め、その旧植民地への責任の自覚の薄さが指摘され、戦中派にありがちな歴史認識の甘さと評された(成田:2009,p.328)。しかし、例えば李登輝について、日本統治期の教育を受けた知識人というより漢民族世界の傑物として評価した点などに見られたように、戦中派としての歴史認識の甘さという司馬の欠点が、皮肉にも台湾を旧植民地という位置に限定せず、台湾島の時間の流れに位置付ける視点を示しえたとも考えられる。また、こうした台湾島を主体とした記述が 1990 年代初頭に知名度のある作家である司馬遼太郎の新聞連載のかたちで発表されていたことは、当時の日本において台湾研究は本格化し始めたばかりだったにも関わらず、同時代の台湾現地で進展中であった歴史認識の視野が、既に当時の日本の一般紙にもたらされていた事実を示してもいる。

他方で、司馬の命題であった中華文明の「辺疆」として台湾に見出そうとしたアジアの近代

像に関しては、この時期においてとりわけ同時代の日本の状況との対比が背景にあったことが見えてくる一方で、『台湾紀行』で示された具体例の中からは明確なモデルは見えてこなかったと言える。司馬のアジアの「近代」へのビジョン自体はまた、明治以降の知識人の中華文明認識の系譜において対照することで、より明瞭にその位置付けを把握することのできるものでもあるため、この点は今後の課題としたい。

引用文献

王甫昌・田上智宜訳(2007)「日本台湾学会第 9 回学術大会記念講演 於 海外職業訓練協会(OVTA) レセプションホール「渚」現代台湾における族群概念の含意と起源」

片山杜秀(2013)「日本国の形式(12)日本人とウラル・アルタイ語」『新潮 45』32(8)

蔡焜燦(1998)「台湾人の心のなかの司馬遼太郎」司馬遼太郎と台湾紀行を語る会『司馬遼太郎と台湾』偉聖印刷有限公司

司馬遼太郎・貝塚茂樹(1971)「毛沢東とつきあう法」『文藝春秋』49(4),1971.4 号

司馬遼太郎・金達寿・田中明(1980)「なぜ「近くて遠く」なったのか (日本と韓国・あしたのために<特集>)」『諸君』12(4), 1980.4 号

司馬遼太郎(1994)『街道をゆく四十/台湾紀行』朝日新聞社, 単行本版(初出:『週刊朝日』1993.7.2.号～1994.3.25 号)

司馬遼太郎(1999)「中国とは何か(上)(下)(未公開講演録 愛蔵版-6 完-司馬遼太郎が語る日本)」『週刊朝日』104(30), 1999.7.5 号 (1993.1.6 台北市における一問一答を採録)

司馬遼太郎(1998)「日本、中国、アジア」『歴史と風土』文藝春秋, (1971.7.17 の談話を採録)

周英明(1998)「書評司馬遼太郎「台湾紀行」」司馬遼太郎と台湾紀行を語る会『司馬遼太郎と台湾』偉聖印刷有限公司

ソーヴァジョ、江実訳(1938)「ウラル・アルタイ語の研究の新動向:「ウラル・アルタイ語の語彙の研究」より」『東洋史研究』3(4)

菅野敦志(2011)『台湾の国家と文化/「脱日本化」・「中国化」・「本土化」』勁草書房

陳舜臣(2005)「台湾の旅のこと」『朝日ビジュアルシリーズ/週刊街道をゆく No.09 台湾紀行』朝日新聞社,2005.3.27 号

成田龍一(2009)『戦後思想家としての司馬遼太郎』筑摩書房

西川祐子・上野千鶴子・萩野美穂(2011)『フェミニズムの時代を生きて』岩波書店

延吉実(2002)『司馬遼太郎とその時代(戦後編)』青弓社

羽根次郎(2001)「台湾史研究者・戴國煇氏の「遺言」」東アジア文史ネットワーク編『＜小林よしのり『台湾論』を超えて＞-台湾への新しい視座-』作品社

日野稚子、村井重俊(1999)「李登輝総統への思い/司馬遼太郎からの手紙/台湾紀行」『週刊朝日』

104(56), 1999.12 号

福田みどり(2013)「アジアの熱気を愛して」『文芸春秋』91(3),2013.3 号

松本健一・関川夏央・片山杜秀(2013)「司馬さんの炯眼 日本はアジアなのか 特別座談会 (生誕90 周年記念特集 司馬遼太郎が見たアジア)」『文藝春秋』91(3), 2013.3 号

丸川哲史(2005)「『台湾紀行』に描かれた日本像」『朝日ビジュアルシリーズ/週刊街道をゆく No.09 台湾紀行』2005.3.27 号

村井重俊・山形眞功・山崎幸雄・藤谷宏樹・浅井聡(2020)「司馬遼太郎と昭和 特別編 「街道をゆく」「余談の余談」担当者座談会 司馬さんの昭和、書かなかった小説」『週刊朝日』125(25), 2020.5.8 号

吉田信行(1998)「書評/街道をゆく四十/台湾紀行：タブーに挑戦・勇気ある探訪」司馬遼太郎と台湾紀行を語る会『司馬遼太郎と台湾』偉聖印刷有限公司採録(初出：1994.11.20 産経新聞)

注

⑴ 「街道をゆく」は、司馬が 1971 年～1996 年に国内外を探訪した紀行文シリーズである。台湾でも、中国語版が鍾肇政審訂/李金松訳『台湾紀行』台湾東販,1995 で出版された。

⑵ 日野稚子、村井重俊「李登輝総統への思い/司馬遼太郎からの手紙/台湾紀行」,p.145 採録の吉田の言葉から抜粋。また、当時は台湾の動向に伴い、日本側でも台湾への関心が高まっていた時期だったが、その動向の一例に、戒厳令解除以降初めて、政界・学会・マスコミを集めて 1990.12.10 に日本で開催された「第一回台湾問題国際シンポジウム」がある。ここで、台湾を巡る関心事は、主に①対中関係②冷戦崩壊と民族自決③日本がアジア一体化に参入する上でのパートナー④植民地期への関心、といった点だった。当時の司馬の東アジア情勢の中の台湾の位置への把握は、概ね同時代の日本における台湾への関心の項目を網羅していたと言える(吉田勝次編『海図なき航海-一九九〇年代の台湾』田畑書店,1991 参照)。

⑶ 村井重俊「(街道をついてゆく/司馬遼太郎番の６年間：１５）総統と対談」『朝日新聞』大阪府・２地方,2008.5.13,朝刊(25)

⑷ 戦前には江実がフランス言語学会の動向として、ウラル・アルタイ語族の存在を肯定したソーヴァジョの論文を訳した「ウラル・アルタイ語の研究の新動向:「ウラル・アルタイ語の語彙の研究」より」(1938)が見られ、まさに司馬の少年期から青年期にかけてこの学説が日本で機能し始めていたことがわかる。また、ソーヴァジョ(江実訳,1938)によると、「やゝ科学的に」ウラル・アルタイ語の相関を主張したのは言語学者カステレンであり、19 世紀の中頃には、ウラル語研究の基礎を築いた学者たちが彼の主張を支持することでウラル・アルタイ語の相関は「眞の科学的の意味に於いてではないが」概ね認められたという(p.58)。

⑸ 日野稚子、村井重俊「李登輝総統への思い/司馬遼太郎からの手紙/台湾紀行」, pp.152-153 採録、司馬の蔡焜燦宛の手紙より抜粋

⑹ 後者の「日本圏」構想が『台湾紀行』でどのような形で影響したかについては、紙幅の関係上、文中で展開することができなかったが、例えば司馬の日本語世代との交友に見ることができる。旧帝国側の人間であることを突きつけられた韓国紀行などとは対照的に、台湾紀行では司馬は自身と同世代の李登輝をはじめとした日本語世代と意気投合し、戦前・戦中に共通して経験した軍隊や大学教育の記憶に「里帰り」することで、彼らの姿を自らの延長線上に描いている。その結果、戦前・戦中、そして「戦後」の日台を跨ぐ時空間が、切れ目なく繋がることが可能になっていたと言える。この点は、指摘されてきたように旧植民地との立場の非対称性への認識の甘さにも繋がっているが、背景には戦中派としての戦前・戦中の自己への再検討の薄さがある。これは、同年代の「日本人」として経歴を共有しやすかった日本語世代と戦中派が、「戦後」において新たにどのように関係を結び、それが認識に反映され得たかを示す一例でもあり、詳細な検討は別稿に譲りたい。

⑺ 村井重俊「司馬遼太郎没後２０年、「街道をゆく」と近江/寄稿、村井重俊・週刊朝日編集委

員」『朝日新聞』地方(滋賀全県) 2016.3.29 朝刊 28 面

⑻ 例えば、『フェミニズムの時代を生きて』(2011)において、1937 年生まれの西川は日本の戦後における旧植民地との関係に触れ、「長い間、韓国・台湾・中国に行く手段もなかったし、有罪感覚があるから行くのを憚る心理もあったと思う。私の場合、韓国・台湾・中国はフランスよりも遠かった。」(pp.168-169)と述べていた。司馬のような戦中派においては、長らく渡航手段がなかったことが戦前のイメージを持ち越す方向に作用していたのとは対照的である。

⑼ 司馬は、中国の古代思想の中にも少数ではあるが「公」の思想が儒教の『礼記』などにもあるとしつつ、それをより重視したのは法家の方であり、秦の失敗以降、結局中国には根付かなかった、という論を展開している(『台湾紀行』,pp.52-53)。

⑽ 日野稚子、村井重俊「李登輝総統への思い/司馬遼太郎からの手紙/台湾紀行」,p.144 採録、吉田信行宛の司馬の手紙より。

⑾ 『街道をゆく』が始まったのは 1971 年だったが、その前に実現しなかった旅があった。1954 年に当時、司馬と交友の深かった、金達寿、姜在彦、李進熙らと韓国へ行く案だったが、他の在日朝鮮人の人々や編集者を含め、司馬の山荘で大激論となり、実現はしなかったという(村井・山形・山崎・藤谷・浅井:2020,p.133)。このエピソードによれば、司馬はこの時から既に韓国への関心を見せていたことになる。

⑿ 日野稚子、村井重俊「李登輝総統への思い/司馬遼太郎からの手紙/台湾紀行」,p.144 採録、吉田信行宛の司馬の手紙より。

⒀ 沈榮欽「讓我們一起走向未來文明的備忘錄」『博客來』
HP<https://www.books.com.tw/products/0010898353?sloc=main>最終閲覧日時:2021.9.13

⒁ 当時刊行されて間もない戴国煇『台湾―四百年の歴史と展望』(1993)の方向性などと一致している。戴自身も、客家としてのアイデンティティを持つ人物として『台湾紀行』の中でも司馬との初対面のエピソード(『台湾紀行』,p.194)が紹介されているが、この著作についても紀行の道中に司馬が手に取っていたことが作中(『台湾紀行』,p.340)でも言及されている。

⒂ この院生たちと司馬は台湾初訪問の初日に司馬の滞在先で台湾や中国大陸について語り合ったテープが残されている(司馬 : 1999,pp.124-141)。学生たちの質問に応じて、司馬が語る形式だが、客家人や台湾の「公」、儒教、中台関係の行く末、といったテーマが語られており、こうした内容は『台湾紀行』の文中にほとんどそのまま反映されている。司馬が元から持っていた考えではあるが、このような台湾青年たちとの会話を経ていたことで、より『台湾紀行』の同時代への語りかけの側面が強まったと言えるかもしれない。

⒃ 司馬自身、『台湾紀行』の中で、「私」がその漢字の仕組みから小作農が地主に租税として出す分の収穫の残りを囲うことを指すのに対し、「公」は漠然と「私」から租税を取る側、という「私」の対義語という定義しかなかったと推測し、中国古代思想における「私」の明快さと対する「公」の曖昧さを指摘した(『台湾紀行』,p.101)が、この古代思想を借用した司馬自身も結局それ以上の「公」の明確な定義を打ち出すことはなかったと言える。